



## 北町観音堂

1603年、今から410年余りに徳川家康が江戸に幕府を開いて以降、江戸を政治・経済の中心とするため、江戸日本橋を起点に、東海道などの五街道や日光街道などの脇街道が整備されました。あわせて、街道には関所や大名の参勤交代などのため宿場が整備されました。

現在の北町の観音堂の前の道は、川越街道の旧道です。川越街道は五街道や脇街道ではありませんが、江戸の守りの重要な拠点である川越へと至る重要な道でした。そのため、宿場が置かれ、現在の北町の商店街は下練馬宿として本陣も置かれ、練馬区では唯一の宿場町でした。江戸時代から続く歴史ある商店街であり、宿場町としての趣を現在に伝える石仏などが残っています。

この観音堂の西側には本陣がありました。宿場の中心的な場所であるところに、仁王像や奥のお堂にある観音像が置かれています。聖観音は1682年（天和2年）今から330年余りに建てられたものです。台座の石には中野、大久保、野火留、新倉、白子、赤塚などの地名が刻まれ、街道沿いの広い範囲の人々から信仰されていたことがうかがえます。両像とも区の文化財となっています。



## 清性寺の白狐稻荷

清性寺は江戸時代の初期からあり当時の「新編武蔵風土記稿」にも記録されています。神明山観音院と号し。本尊不動は弘法大師の作で、長さ1尺2寸の立像です。歴代の住職の墓石の名前を見ると、かなりな高僧であったことがわかり、権威の高さがうかがえます。境内には明治の初期までは、鐘楼もあったと言われ、寺の敷地はかなり広大であったと思われるます。



清性寺の入り口にある「招魂碑」には千川上水の開拓者、千川家の名前を始め、多くの阿弥陀堂有力者の名前が刻まれています。1662年（寛文2年）の住職の墓が最も古く、330年以前の徳川時代初めころから本寺が実在していた事がわかります。

練馬区ふるさと文化館に現存する1754年（寛政4年）の「下練馬村絵図」を見ますと、本寺の規模も知ることができます。



境内にある「たらようの木」たらようの葉は、葉の裏面に傷をつけると黒く変色し、長期に



わたって残るため、字を書いておくことができる。これがはがき（「葉書」）の語源になったといわれ、葉書の木、郵便局のシンボルツリーでもあります。